

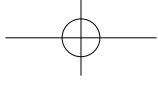
InDesign Laboratory

連載 第 7 回
インデザイン研究室

電子書籍を作ってみよう

～ InDesign CS5 での『EPUB』書き出し～





今年の5月に日本での発売が開始されたアップル社のiPad。これをきっかけに、日本にも、一気に「電子書籍」ブームがやってきた。今年が「電子書籍元年」と言われ、今まで印刷物の制作のためだけに Adobe InDesign を使ってきた人たちにとってにも、今回のブームは無視できない状況のようだ。

今まで「電子書籍」と言えば、どちらかというと「マイナー」なイメージの電子ブックや携帯専用の電子コミックが主流だった。今後、iPad に続いて、魅力ある電子書籍端末が多種発売される予定になっており、これまでの市場規模とは比べられないほどの大きなブレイクが見込まれる。そして、「出版不況時代」と言われ、苦戦を強いられている出版社も、在庫を持つ必要もなく、輸送の手間もかからない「電子書籍」の普及こそが、生き残りへの大きなチャンスととらえられているようだ。

■「電子書籍」のフォーマット

ひとくちに「電子書籍」と言っても、いろいろなフォーマットがあり、特に日本では端末専用のフォーマットで発売されているものも多い。アップル社の「eBook Store」、アマゾン社の「kindle store」も日本でのサービスは現時点で開始しておらず、今後どの端末と、どのフォーマット（形式）の組み合わせで「電子書籍」を閲覧する人が多くなるかの予測は難しいところだ。だが、InDesign から直接書き出すことのできる「PDF」形式と「EPUB」形式は、非常に汎用性が高いフォーマットとして挙げられており、InDesign ユーザーには、少し有利な状況とも考えられる。

■ InDesign の「PDF」書き出し

InDesign ユーザーであれば、InDesign の「PDF 書き出し」を利用していない人はほとんどいないだろう。校正用にやりとりするもの、印刷所に入稿するための PDF/X だったり、WEB サイトからダウンロードしてもらうための比較的容量の軽いものだったり、InDesign からの「PDF」の書き出しでは、いろいろなタイプの PDF を作成することが可能だ。

電子書籍として、販売する PDF を作成するのであれば、InDesign から書き出した PDF を Adobe Acrobat Pro など加工する場合

が多いようだ。

PDF では、InDesign でのレイアウトがくずれることなくそのまま発信できるため、端末の画面サイズが大きければ、デザイン重視の雑誌等の発信には非常に有効だと言える。

■ InDesign の「EPUB」書き出し

実は InDesign では、以前のバージョンから、「EPUB」の書き出しに対応していた。CS3 では「メディア間の書き出し」→「XHTML Digital Editions」、CS4 では「Digital Edition 用に書き出し」というメニューが用意されていた。CS5 では「書き出し先」→「EPUB」というメニューになり、以前の「Digital Edition」というのが実は「EPUB」のことだったのだと認識した人も多いはずだ。

「EPUB で書き出す」ということは、ユーザーが端末で、「文字サイズを自由に変更することができコンテンツとして書き出す」ことで、1ページに表示される文字数の増減で「リフロー」を起こしても大丈夫なコンテンツを作成する必要がある。

この時点で、InDesign 上で丹念にデザインされたレイアウトは意味が無いために、「テキストデータ」とその間に挿入された「画像データ」がコンテンツそのものとなる。そのため、既存の InDesign データからの「EPUB」書き出しには、かなりの下準備が必要で、さらには、書き出した後のデータを調整するため、XHTML の基礎知識も必要ということがわかった。

印刷物だけではなく、WEB のほうにも明るい InDesign ユーザーには非常に有利な状況ではあるが、実際のところ、InDesign ユーザーで、「WEB はちょっと…」という人も多いはず。今後はそういう人に向けた解説書などが多く出版されると思われるので、これを機会に XHTML を勉強するということも視野に入れておく必要がありそうだ。

実際に InDesign CS5 から EPUB を書き出す実験をしてみよう。PDF のように、各ページを見たままに「固めて」出力するわけではなく、フォントサイズの変更によるリフローにも対応したデータを作成しなくてはならない。DTP 制作というよりは、WEB 制作に近い考え方で作成することになりそうだ。

そして現時点では縦組には対応していないため、作成するコンテンツが EPUB に向けたコンテンツかどうかを見極める必要もでてくる。レイアウトや装飾に凝ったページのレイアウトを EPUB で発信することは現実的には無理で、その場合は他のフォーマットにすることを検討すべきであり、文字中心の読み物でも、「縦組み」であるほうが望ましいコンテンツについても、EPUB 以外の選択肢を考える必要が出てきそう。しかし、現在使用している InDesign から「直接書き出せる」というメリットはたいへん大きいので、どのくらいの手間と知識で EPUB 制作が可能なのかを実験してみることにした。

■書き出し前の下準備

既存の InDesign データを、EPUB で書き出すためには、レイアウトデータをできるだけシンプルなものにする必要がある。まず、通常のレイアウトであれば、マスターページに配置することが多い「ノンブル」、「ツメ」「柱」などを削除、飾り罫等の装飾も取り除いていく。配置した画像データが本文内にインライングラフィックとして挿入されていない場合は、リフローした時のことを想定して、本文内の表示したい場所に、インライングラフィック（アンカー付きオブジェクト）として挿入しておく必要がある。表組はそのまま書き出せるようだが、セルの属性などは無効になり、構造のみが引き継がれる。

また、配置画像のファイル名や段落スタイル名を半角英数字とハイフンのみにすることが必須のようだ。今後は、新規で制作するドキュメントは、電子書籍での発行も見据えて、あらかじめ半角英数とハイフンのみで、ファイル名やスタイル名を付けるようにするという必要も出てくるだろう。

配置画像については、EPUB 書き出しの際、InDesign が、自動的に DTP 用の CMYK 画像を RGB の JPEG 画像や GIF 画像に変換してくれる。自動的に変換された結果が気に入らないのであれば、手動で変換をした画像に置き換えればよいだろう。

「ファイル情報」に登録された内容は、そのまま EPUB のファイル情報となるため、「ドキュメントタイトル」や「作成者」などは、忘れずに入力しておくようにする。

EPUB や PDF が閲覧できるおもな電子書籍端末

形式	端末 Amazon Kindle	Apple iPad	Apple iPhone/iPod touch	SONY ソニーリーダー	Google Editions	SHARP GALAPAGOS
EPUB		●	●	●	●	●
PDF	●	●	●	●	●	●

InDesign Laboratory

EPUBでの目次は、リフローによりページ番号(ノンブル)が定まらないため、目次上で項目をクリックするとその部分にジャンプできるような仕組みにする必要がある。これには、InDesignの目次の自動作成機能が有効で、ページ上にレイアウトしなくても、目次にピックアップする項目を[レイアウト]メニュー→[目次]で、設定しておくだけで、自動的に作成される。

以上のような下準備をして、やっとEPUBでの書き出しを行ってよい状態になる。一度下準備をしないで書き出して見たが、書き出した後の編集を不慣れたソフトを使ってやるよりも、使い慣れたInDesignで、できる限り理想的な形に近づけておいたほうが、InDesignユーザーには、作業のストレスが少なくてすむような感じだ。

実際の書き出しは、[ファイル]メニュー→[書き出し先]→[EPUB]を選択し、途中で出てくるダイアログに必要な設定をすると、「.epub」という拡張子がついたファイルが書き出される。

■「EPUB」の編集に必要なもの

InDesignから書き出した「EPUB」が、そのままでも問題ないものであればよいのだが、そういうわけにもいかないようなので、書

き出したEPUBを編集、検証するためにいくつかのソフトウェアを使用することになる。まずは、編集ソフト「Sigil」。EPUB形式の読み書きができ、WindowsとMac OS X、Linuxに対応しているため、いろいろなところで紹介されている。残念ながら日本語版ではないため、英語のメニューと向き合わなくてはならないが、フリーソフトということで、使用する人も多いはずだ。

書き出したEPUBファイルをSigilで開いてみた。端末での表示状態を見ることができ「Book View」とXHTMLのコードを見たり編集したりする「Code View」の両方をうまく扱いつつながら、EPUBを編集していくことができる。こうなると、Adobe DreamweaverでのWEBページの作成と同じような感じなので、WEBの制作者たちは、EPUBファイルの拡張子「.epub」を「.zip」に手動で書き換え、「Stuff It Expander」で解凍して、Dreamweaverで扱えるファイルにバラしてから、編集作業をおこなうとのことだ。バラしたファイルは、「Drag and Drop EPUB.app」などを利用して、再び「.epub」に圧縮しなおせばよい。

■「EPUB」検証に必要なもの

Sigilで編集・調整した拡張子が「.epub」のEPUB形式のファイルを、パソコン上で検証するためには、Adobe Digital EditionsやWEBブラウザのFirefoxとそのアドオンのEPUBReaderという組み合わせで開き、見た目をチェックする。これらを使えば、InDesign以外は、フリーソフトなので、最も

お金をかけずにEPUBを作成する組み合わせということになりそうだ。

さらにcodeの文法チェックには、WEB上のサービス「ePub validator」などを利用する。

■ iTunes に転送して iPad で閲覧

できあがった「.epub」ファイルを、iTunesにドラッグ&ドロップで登録し、iPadに転送してみた。事前にインストールしておいたiBooksの本棚の中に、無事今回作成したタイトルが表示された。目次もちゃんと機能していて、フォントサイズの変更もOK。ただ、フォントを大きくすると、見出しが大きくなりすぎて、1行のものが2行になってしまったりと、あまり「よい感じ」には表示されないの、ある程度のあきらめのようなものが必要かもしれないと感じた。写真画像は思ったよりも小さく表示されたので、大きさにこだわりがあるなら、自動での書き出しをおこなわないで別の方法をとる必要がありそうだ。

EPUB作成で使用するソフトウェアの参考URL

Software	URL
Adobe Digital Edition	http://www.adobe.com/jp/products/digitaleditions/
Firefox + Epub Reader	https://addons.mozilla.org/en-US/firefox/addon/45281/
Sigil	http://code.google.com/p/sigil/
Stuff It Expander	http://www.stuffit.com/mac-expander.html
ePUB validator	http://threepress.org/tools/
Drag and Drop EPUB.app	http://indesignsecrets.com/

ワークフロー

下準備



編集



検証



転送



Adobe Digital Publishing Suite

10月25日、アドビシステムズ社は、Adobe Digital Publishing Suiteを発表。Digital Publishing Suiteは、デジタルコンテンツを作成、パブリッシュ、最適化し、コンテンツ販売企業や主要な携帯端末向けのマーケットプレイスを通じた消費者への販売を行うことのできる、パッケージ化されたホスティングサービスとビューワー技術のセット。Adobe Creative SuiteとAdobe InDesign CS5ソフトウェアを基盤として構築され、パブリッシャーのブランドを冠した画期的な読書体験の設計と配信を、柔軟な商業モデルと詳細な解析レポートのサポートと合わせて提供。InDesign CS5、PDF、HTML5、Digital Publishing Suiteを使用し、効率よくInDesignで様々な様式に対応したレイアウト、また新たな水準のインタラクティブな機

能を直接ネイティブに作成し、デジタルコンテンツを配信および収益化することができる。さらに、編集内容や広告コンテンツを最適化することによって完全にエンドツーエンドのデジタルパブリッシングワークフローを実現。「パブリッシング業界は大きな変革のさなかにあり、またパブリッシャーが新しいモバイルハードウェアプラットフォームをターゲットとすることに伴い、アドビシステムズ社には編集および広告に関して新しい時代のイノベーションが求められています。InDesign CS5のワークフローとDigital Publishing Suiteの各サービスを活用することにより、プロフェッショナルなパブリッシャーは新しいクラスの画期的なデジタル雑誌をデザインおよび商業化し、高付加価値の購入顧客や広告出稿企業を惹き付けるさらにリッチでダイナミックな読書体験を作り出すことができます」とのコメントを発表。